

僕の声が聞こえた
と聞いた

iong

赤尾と青木に捧ぐ

「...へえ、あなたは輪廻を信じるのね」

毛布から肢体をのぞかせながら、薫は気だるく煙草を吹いた。

「私は信じないわ。前世に良い事したら今が不幸だとか、誰かの生まれ変わりだとか。今より過去が勝ったら今の自分にどう言い訳すればいいのよ、フフ」

確かに僕が覚えている薫は、過去に”依存しない”などという生易しいものではなく、その日あった悪い事はその日のうちにすっかり忘れていくくらいのタフさがあった。

「...それに、いつまでも終わりがいいなんて救いがないじゃない」

煙がため息を形作り、ゆっくり漂って僕の頬に当たる。

「フフ、相変わらず女々しいわねあなた」

最後に交わした会話は確かそういう感じだった。いつも通りのペースで眠くなるまで話し、いっしょに寝て、起きたらいつも通り別々の駅に別れた。今朝の事だ。

「あなたがたの関係をお伺いしてもよろしいですか？」

「会社の上司と部下です」

警察に聴取を受ける僕から一部屋向こうのリビング、薫の遺体の側で薫の婚約者が泣いている。“睡眠薬の過剰摂取”と説明を受けた。キッチンには空になった小瓶と、薫のメモ書きがあったという。メモを見せてはくれなかったが、警察に呼び出しを受け、今聴取されているという事はきっと僕の事も書かれていたに違いない。昨日会っていたのに今担架に乗って運ばれていく薫を見ても、冷たい手に触れても、何一つ実感は湧かなかった。

「...そうですか、分かりました。ありがとうございました。ご協力感謝します」

なにかを探るまなざしと「間」を感じながらも、僕は薫のいたリビングに体を向け、警察と目を合わせずにやり過ごした。昨夜会ったことは喋らなかった。

「申し訳ありませんが、一度署までご同行願えますか？」

後ろから白髪交じりで強面の、見るからに叩き上げの刑事がやってきて、僕の肩に手を回す。

「...はい。分かりました」

刑事は無表情のままうなずき、そのままゆっくりと僕をパトカーに誘導する。

昨日の薫を思い出しながら、帰りのパトカーはサイレンを鳴らさないんだな、と妙に冷静な自分を心で笑う。隣には薫の婚約者が乗っているが、お互い会話もなく、目をあわすこともなく、うなだれるように暗い足元を向いている。新車の匂いがするパトカーは警察署への道をすべるように走った。

僕たちは応接室のような部屋に通された。TVで観るような、窓に鉄格子がある部屋でも机以外

何もない部屋でもなく、自分が警察署にいることを忘れるほど普通の部屋だ。空調が効きすぎていて少し肌寒い。

「そうですか、分かりました。すみませんね、もうしばらくお待ちくださいね」

現場にいた刑事とは別の若い男が穏やかな顔で笑う。男は薫の家で行われた一連の聴取をもう一度丁寧に言い、綺麗な字でノートを取り、会釈をして部屋を出て行った。

「...君は...」

静かになった部屋に、弱々しいかすれた声が響く。

「君は、なぜ家に呼ばれたんだ」

「...薫さんには本当に助けていただいていたいました。私は薫さんの部署の部下です」

「なぜ警察署に来なきゃいけなかったんだ」

「...すみません、分かりません」

「薫がこうなったことに、なにか関係あるんじゃないのか？」

「私が薫さんと会ったのは、今日の会社が最後です。仕事中はいつもと何も変わりありませんでした。...帰宅中に知らない番号から着信があって、取ってみたら警察だったんです。こんな突然なことで、まだ正直実感がなくて...」

「...そうか」

「...すみません」

「...メモは」

ぎくりとした。顔には出さずにいられたと思うが、その単語を聞いた瞬間に体温が上昇する。

「メモは、君は読んだか？」

「...いいえ」

「君の名前は"山城明"と言うんだろう？薫はなんで、わざわざこんな時に君の名前を、しかもフルネームを書いたんだろうな」

ドキリと、ショックのような鼓動が胸を震わせる。やはり僕のことが書かれていた。

「ぼ、私の名前を、ですか」

「...なあ、本当の事をそろそろ教えてくれないか。なにか関係があるんだろう？」

婚約者がゆっくりと立ち上がり、鋭い目で近づいてくる。

「なあ、教えてくれよ。お前はいったい、なんなんだよ。なあ！」

両肩をつかまれ、がくがくと揺さぶられる。怒りに震える声は徐々に聞き取れなくなり、ただの叫び声になった。顔をくしゃくしゃにしながら、涙と鼻水を床にぼたぼたと落とす。

「離して、離してください！」

必死に振り払おうとしても、ものすごい力で逃げるができない。騒ぎを聞きつけた警察官が勢いよく部屋に入って来て、僕に掴みかかる大男を引きはがした。彼は力なく床に倒れ込み、そのまま号泣し始めた。

目の前で人目を気にせず号泣する真田武と、薫から聞いていた真田武との若干のずれを感じていた。もっと自分勝手にプライドの高そうな人間を想像していた。もっとも、仕事から帰ってきたらプロポーズをした婚約者が死んでいて、彼女の人生最後のメモには知らない人間の名前が書かれていて、いま警察署に連れてこられているのだ。間違いなく彼は僕が薫を殺したと思っているだろう。こうなるのも無理はないのかも知れない。

「山城さんはこちらの部屋に来てください」

警察官に促され、僕は逃げるように部屋を出た。

「私は前日の夜、薫さん...薫と会いました。ですが、その時は何も変わりはありませんでした」

通された部屋は机とソファ以外何もない部屋だった。僕はすべてを話すことにした。途中で供述を変えれば、僕は容疑者として扱われるだろうか。しかしメモの事がどうしても気になって、実物を見るためにはこうするのが一番早いと思った。

「...私は薫を愛しています。...殺すなんて、できるはずがありません。まだ実感が湧いていないくらい、昨日も今日も、全くいつも通りでした」

刑事はまっすぐ僕の目を見たまま、黙って次の言葉を待っている。

「私たちは時々ホテルを借りて、朝まで他愛のない話をしていました。昨日もそうです。婚約者の真田さんに急な仕事が入り"会社に泊まる"と連絡を受けたあと、薫は私に電話をくれました。飽きるまで話しあって、一緒に寝て、会社に向かう電車はいつも通りそれぞれ別の駅から乗りました。仕事の事はお互い話さず、普段言えないわだかまりや心情を晴らす場でした。彼女の前にいる時だけ、本当の自分でいられました」

普通に話しているつもりだったのに、視界が歪み、涙がテーブルに落ちる。

「昨日、薫に"プロポーズを受けた"と聞きました。幸せを願う反面、もう会えないことの寂しさと、自分が伴侶ではないことの悔しさがこみ上げました。...祝福を言おうと思ったのに泣いてしまって、薫はごめんねと笑いました」

涙が止まらなかった。堤防を決壊したように、今まで言えなかったことを吐き出す。

「あの時僕は"生まれ変わってもまた会いたい"と、思わずつぶやいてしまった。あの時は輪廻なんて信じないと笑っていたけど、僕の一言が原因で薫は死んだのかもしれない。まさかこんなことになるなんて」

部屋に僕の嗚咽が響く。刑事はただ静かに、僕が泣きやむのを待ってくれた。

「...これは個人的な意見ですが、山城さんが罪に問われることはきっと無いでしょう」

若い刑事が言葉を探しながら、落ち着いた声で話を始める。

「仮に山城さんも一緒に、その、命を絶とうとした場合は、心中未遂として、幫助が適用されます。でも山城さんはちゃんと朝会社に向かった。山城さんはそのつもりでは無いことを薫さんも分かったはずです。それに、"生まれ変わっても"とおっしゃった事も、おそらく教唆にはなりません。山城さんに対して薫さん自身が"輪廻は信じない"とはっきりおっしゃったんですよね？それは逆に、山城さんが命を絶つ確率を下げたように思います」

「...えと、どうですかね？」

「...」

「ご、ごめんなさい、お気を悪くしましたでしょうか」

「...ありがとうございます」

「...」

「...」

「...あなたは」

「...はい」

「山城さん、あなたは隠さずに、もっと自分のことを"僕"と呼んでもいいと思います。話してくれてありがとうございます」

若い刑事は穏やかな顔で笑った。

プロポーズをした真田も自責の念を感じていた。システム管理会社に勤め、日をまたぐ事は当たり前、時には会社に泊まりこみで仕事をする彼は、薫の気持ちが離れていると感じていたらしく、完全に縁が切れることが怖くてプロポーズを強行した、彼女を追い詰めたのは自分かも知れないと供述した。僕は彼に頭を下げ、全てを洗いざらい話した。最初は驚いていたが、「浮気の兆候はあったが、なるほど見つからないはずだ」と自嘲するように笑った。

淡白な司法スペースから霊安室に移され、桐の棺に納められた薫を見下ろし、恐る恐る顔に触れる。冷たい。

「この度はご愁傷様です」

後ろから、事情聴取を受けた若い刑事がやってくる。

「さきほどご要望のあったメモですが、真田さんにお受取を拒否されまして...いかがでしょう、こちらで処分もできますが、署で保管の必要が無くなりましたがお受取なさいますか？」

「はい、いただきます」

「...とは言っても、キッチンにあったものだから、遺言ではなくて本当にメモだったかもしれませんが。書いてあるのは山城さんのお名前と、8ケタのつながった数字は山城さんの誕生日です。19930211。あとは薫さんの銀行口座番号です」

「銀行口座...」

「はい。失礼ですが、山城さんのお名前で口座の確認もさせていただきましたが、山城さん名義の口座はありませんでした。薫さんの口座は確かにありましたが、1万円ほどの預金が1年以上放置された状態でした。なぜわざわざ書いたのか、なにかご存知ですか？」

――

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件ですか？」

「こちらに藤瀬薫か、なければ山城明という名義で貸金庫をお借りしておりませんか？」

「ふじせ かおる様 と、やましろ あきら様 ですね。あの、失礼ですがお客様は...」

「山城です。藤瀬は、親戚です」

免許証を差し出すと、銀行員はニコリと微笑んだ。

「大変失礼いたしました、少々お待ちください」

真田に「少しだけ外出させてほしい」と、場所は伝えず通夜の席を抜け出した。メモを見てピンと来た事をどうしても確認したかった。彼女は広告代理店に勤める以前、役所で遺言の公正証書を書いていた。

「お待たせいたしました。ございました、藤瀬薫さまのお名前でお使いいただけてます。山城様のお名前は代理人としてご登録されております、カードキーがございましたら今お開けになれま

すが、いかがいたしますか？」

「カードキー、ですか」

「はい。カードキーと、あとは暗証番号が必要です」

薫の部屋には真田も、ほかにも必ず人がいる。今日中にカードキーを探すなんてまず無理だ。

「ええと…」

照れ隠しに、キーが入っていない鞆の中をそれらしく探す。見当たるはずはなかった。

「あはは、カードキー、忘れてきちゃいま…あれ」

鞆をあきらめ財布を開いてみると、カードポケットの一番上に見たことのないカードが入っていた。僕はそれを取り出してみる。

「あ、そちらです。カードキー。お帰りになる前に見つかってよかったですね」

「…あはは、そうですね。失礼しました」

会った夜に薫が入れたのだろうか。とすると、この貸金庫はいつ借りたのだろうか。いつから代理人として僕が登録されているのだろうか。もうその時には、自殺を考えていたのだろうか。

入出金に利用しているだけなら一生知ることが無かった、銀行の奥にある広いスペースに通される。

「ここからはお客様のプライバシーもございますし、お客様でお願いいたします」

スモークガラスで中を隠している自動ドアが開く。室内はどの壁も天井までぎっしりと引き出しが設置されている。それぞれの引き出しには全てテンキーがついていて、暗証番号を押すと開くのだろう。ゆっくりと辺りを見渡し、指定された番号の引き出しを探す。

「フフ、いつも祝ってくんなかったくせに。…誕生日、覚えてたんだね」

1、9、9、3、0、2、1、1、enter。 ガチャリ という音とともに、引き出しがゆっくりと前に押し出された。中にはシンプルな装飾が施されたブラウンの封筒がひとつ。表書きに書かれた"明へ"の字は間違いなく薫のものだ。僕はそれを恐る恐る手に取る。手が震えている。階段のようにがっしりとした銀の脚立に腰掛け、オープナーで端に切り目を入れる。サク、サク、サク。ゆっくりと封書を開き、数枚の白い紙を広げた。

明へ

ペンを持って早々に「手紙を書くななんて私らしくないかも」と思うけど、明はもしかしたら自分を責めるんじゃないかと思って書くことにしました。まず最初に謝らなきゃいけない、こんなことになってごめんなさい。明が何か責任を感じてるとしたら、私が死んだのは明が原因じゃないから安心してね。私はもうずいぶん前からいつでも死ねる人間なの。明なら、私が日々の出来事を毎日片付けて、切り捨てて生きていることを知ってるはずよ。もし、この手紙の存在を武君にも伝えるのなら「武君が原因でもないですから、君は私を忘れていい人を探しなさい」と伝えてください。二人とも若いんだから、いい人にもきっと出会えるでしょう。

1週間前、私は武君にプロポーズを受けました。彼はきっと「結婚すれば離れなくて済む」と思ったんでしょう。とても人間らしい、彼らしい選択だと思った。もうそれでもいいかもと思った。彼の事は全然嫌いではないし、いつもいつも仕事で忙しいのに、私にとっても良くしてくれる。結婚すれば、傍から見れば幸せな家庭に映るはずです。でも、それは幸せなのかしら。「生きたい」が「生きなければならない」になったら、幸せなのかしら。プロポーズを受けてからずっとずっと考えてるけど、今度明に会ったら答えは出るかな？

照れくさい言い方だけど、「運命」って言葉も信じないけど、明と会ったことはそう呼んでもいいと思っています。今まで関わる機会のないタイプの間が偶然中途採用で入ってきて、私の部下になって、私をよく思ってくれて、好きでいてくれて。孤児だった私の中にこんな感情があるなんて思わなかった。驚くほど人に優しくなれたし、日々が楽しく思えるようになった。一緒にホテルに泊まる時なんて、まるで恋愛中の男女みたいに「会社なんて休んじゃおうよ」って思う時があるよ。（口には出さないけどさ。）

どちらかが男だったら良かったのにね。神様なんて嫌なやつだよ、わざわざこんな形で出会わせてさ。文献や法律から答えを探せば探すほど、見聞きするほど、好きな人が同性というだけで、一緒に「普通」に生活をするのが桁違いに難しくなる。まだ若いあなたにそんな辛い生き方を強要したくない。明はまだまだたくさんの人達と出会えるはずよ。私より良い人見つけなさいよ。お願いね。もしかして明、私のために自分の事を"僕"って呼んでたんじゃない？あなたはとても綺麗よ、だからあなたはもう女性として生きてください。ありがとう。

原因を言葉にするなら（輪廻とか信じない私が書くのも我ながら可笑しいけれど）、「人間でいることに疲れた」と書けばいいのかな。と言うよりも、私は輪廻を信じたくなかったの。もし信じてしまったら、来世にしか逃げ場がないと思ってしまうから。死んだって、そんな保障無いのにね。でも私が孤児じゃなかったら良かった？とか、男だったら良かった？人間じゃない別の

動物だったら良かった？とか、もっともっとシンプルな世界だったら、世間とか体裁とか、そんなものに感情を押しつづされなくても済む世界だったらどんなに良かったらうって、生まれ変わる話はどれも甘美な言葉ばかりで、だからとても嫌だった。今の私が私なのに逃げたらダメだ、ってずっとずっとやってきたけど、良い世界も見れたしさ。もういいの、

手紙難しいね。久しぶりにペンで書くと、キータイプより恥ずかしいのはなんでだろう。途中から反省文になっちゃった。手紙は捨ててほしいけど、きっと明は持ってるでしょうね。こんなもの書いてごめんね。

後は追っちゃだめだよ。輪廻なんてないよ。もしあったとしても、自殺するような人間にろくな道は与えられないでしょう。早く忘れなさい。今までありがとう

2011.09.20 薫

―――

最後の一枚だけ違う便箋を使っていた。僕も、薫も、きっと最後までお互いを分かりあうことはできなかった。

「...逃げないでよ、馬鹿」

スモークガラスの先、そわそわと動く影は見えている。